

2011年3月18日

卒業式式辞

平成22年度卒業式

相愛大学学長 金児暁嗣

先ほど、このたびの東北関東大震災で亡くなられた方々に対し黙念をさせていただきましたが、お祝いの言葉を述べる前に、あらためて被災地の方々にお見舞い申し上げ、ご逝去された方々に心から哀悼の意を表したいと存じます。

さて本日は晴れの卒業式であります。皆さん、ご卒業・修了おめでとうございます。長年にわたりご子息・ご息女を支えてこられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。本学にとりましても、相愛学園長大谷紀美子様ならびに浄土真宗本願寺派総長をはじめ関係各位のご臨席を賜り、平成22年度の卒業式・修了式を挙げてきますことは、誇らしく、大きな喜びであります。しかしながら他方では、被災地の大学が相次いで卒業式を取りやめていることを耳にし、そうしたなかで本学が卒業式を挙げてできることにある種の後ろめたさと申し訳ない気持ちが私のなかにあります。一昨日、津村別院に参拝し、如来様の尊前で卒業のご報告をさせていただきましたが、鈴木ご輪番のご法話の中にも、「このたびの震災で卒業を前にして亡くなった学生がいるかもしれない。それを思うと、公然とめでたいことだと素直に喜べない気持ちもある」という趣旨のお言葉がありました。皆さんには、こうして卒業式の式典を挙げて、日常のあるがままの普通の生活ができることに感謝の気持ちをもつと同時に、み仏に願われた大切ないのちを自覚し、いっそう励んでいただきたいと思います。

本日、総数428名の方々が所定の全課程を修了し、晴れて本日のこの式典に臨むことができますのは、皆さん自身の平素の切磋琢磨の賜物であり、深く敬意を表します。このなかには、34名の中国からの留学生も含まれています。留学生の方たちは異文化の中でさまざま

まな困難に直面したことでしょうが、それを克服し、立派に初志を貫徹されました。その努力を心から讃えたいと思います。同時に、これまでの長い学校教育の期間、皆さんのご家族、恩師、友人、そして社会から受けた恩恵には計り知れないものがあるということに思いを致すようお願いしております。

皆さんの多くは間もなく社会に巣立ち、あらたな舞台での活躍が期待されています。進路はさまざまでありましょうが、いずれにしましても、相愛大学の卒業生・修了生の名に恥じないよう努力し、それぞれの領域で自らの目標を達成してください。

2008年に、南部陽一郎先生がノーベル物理学賞を受賞されました。随分前から常に候補にあがっていた方ですが、ご受賞を機会に、南部先生が書かれたものをいくつか読ませていただきました。ご専門の素粒子物理学だけでなく、教育論や文化論に関するご論考も多く、非常に幅と深みのある研究者でいらっしゃるると同時に、アメリカに帰化されていますけれども、日本と日本の教育研究や若い研究者にもあたたかいまなざしを常に注いでおられます。それらのなかには、これから社会に出て行く皆さんにとっても含蓄に富むご意見がありますので、少し敷衍してご紹介したいと思います。

「学生時代の成績と社会に出てからの成功度とは別物である」と述べておられます。このことは、「社会的成功のためには、在学中の成績よりも目に見えない個人的要素が強く作用している」ことを意味します。もちろん学業成績は大事なのですが、それだけに拘泥していると創造性のない小さな人間になってしまうということです。南部先生はまた、日本人の人間としての欠陥として、「社会的センスが乏しいこと」と「個性がはっきりしないこと」をあげておられます。創造的な仕事をしていくためには、「チームワーク」と「個人的独自性」の両方が必要であるということですが、相互に矛盾するこの2つをいかに両立させるかは、私の専門とする社会心理学においても永遠の課題であります。

これは「公」と「私」という問題でもありますが、要はすべての他者の存在に配慮することのできる、つまり公共心を備えた確たる自己を確立することが重要であり、それは人間である限り一生求め続けなければならないということです。浄土真宗の七高僧の第一祖とされるインドの龍樹菩薩に「他を利するとは即ち自らを利するなり」という言葉があります。私たちは社会の中に生きています。みんながともに生きていく世の中だから、他人をわが身にひきあてよ、という仏教の教えです。「他を利する」からといって「自らを利する」ことを否定しているのではありません。自分をたてて他者をおしのければ世の中にエゴが充満し、社会が成り立ちませんし、逆に他者をたてて自分がつぶれてしまったら、それは愚かなことです。他人の利が自分の利に連なる考え方と行為をしなさい、ということがあります。本学の建学の精神である「當相敬愛」にもつながる龍樹菩薩の言葉を時々思い起こして、社会に出てからも絶えず努力されることを願っています。これからの人生において、皆さんはいろいろな困難に遭遇して苦悩することでありましょうが、努力と精進を怠らず確固とした信念にもとづいた判断をし、より創造的な自己を形成することに努めてください。

ところで、社会に出れば、言うまでもなく大人として自立することが求められます。精神分析学の創始者のフロイトは、晩年に弟子たちから大人の条件を尋ねられました。弟子たちは深遠な回答を期待していたようですが、フロイトは一言「愛することと働くこと」と答えたそうです。「愛すること」と「働くこと」が安定してできれば大人である。精神分析学では、大人とは親からの性愛的自立ができ、愛する対象を家族の外に見いだすこと、そして社会の中で働いて経済的自立ができることが大切だと教えています。こうしたことが安定的にできるためには親からの精神的自立も必要だとされます。一般論としては、あるいはフロイトの生きた近代の始まりの時代にあっては、精神分析学がいう大人の条件は間違っていないと思いますが、しかし近年、若者をめぐる社会・経済状況の変化や卒業後も

更なる研鑽を積みたい人たちの増加とともに経済的自立の時期が多様化していますし、男女関係のあり方の変化に伴い結婚の時期や結婚観が多様化しています。いわば大人基準が曖昧になっているということですが、そうした多様化の中にあっても普遍性をもつ基準があるのでしょうか。私には、働くことの意味を単にフロイトが言うような経済的自立だけに求めることができないように思われます。そこで、大人になることとはどういうことかを考えてみたいと思います。

私が敬愛する財界の方でユニ・チャームの創業者の高原慶一朗会長がいらっしゃいます。生理用品と紙オムツの分野でトップシェアを誇る優良企業に育て上げられたことで知られています。高原会長は浄土真宗本願寺派のご門徒でもあり、私は会長と義兄弟の契りを結んでいる間柄でもあります。その高原会長は、「嘘をつかない、誠実である。人間の魅力は、そんな平凡な心がけに源泉がある。とりわけ“人の心がわかる”人に、人は大きな吸引力を感じる。」「自分の選んだ仕事は、一人では完成できないと知るべきである。気配り目配り心配りなしに人から協力を得ることはできない。」とおっしゃっておられます。

先の南部先生と高原会長のお話に共通する点は、他者との関係のことのほか重視されていることでもあります。人間としての根源的な欲求として、他者から承認されたいという欲求があります。この欲求が充足されるならば、自尊感情すなわち自己を基本的に価値あるものとする感覚が生じます。要するに自律の心が確立された状態です。このように自分自身の存在や営みを基本的に価値あるものとして評価し信頼することによって、私たちは積極的に意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうるのです。ロシアの作家ゴーリキーも「才能とは自分自身が自分の力を信ずることである」と言っています。自己信頼がなければ何事も成就することはできない。このような意味において、自尊感情は精神的健康や適応の基盤をなすと言われています。

さて、私たちの周囲の他者との関係は大きく分けて、家族、恋人、友人などに代表される情緒的表出的な人間関係と、仕事相手、組織・集団における課題達成を目的とした社会的道具的な関係との 2 つが考えられます。他者から承認されたいという欲求を充たすための条件として、この 2 つの関係がうまく保たれていることが必要です。皆さんはこれから卒業・修了して社会に出てゆき、あるいは大学院などに進んでさらに研鑽を積み、なんらかの仕事に従事されるわけですが、仕事という営み自体がまさに、後者の社会的な人間関係それ自体を形成する基礎的な媒介となっていること、そしてその中に働くことの意味を見いだすことができます。なぜなら、どんな仕事でも、たとえひとりで行う仕事であっても、それには必ず他者が介在しているからです。たとえば、新聞配達という仕事は、一見単独で行う仕事に見えますが、新聞が読者の手元に届くまでに実に多くの工程があり、多くの人がそこに関わっています。先ほど、働くことの意味を単に経済的自立だけに求めることができなうと言いましたが、つまるところ信頼や心配りを磨く場が働くということであることに留意していただきたいと思います。

ところで、皆さんは相愛大学で良き友人にめぐり合えたでしょうか。在学期間の中にこれが実現できた人は本当に幸せであります。親から精神的に自立し、アイデンティティや自尊感情を育て、社会性を身につけていく際に、友人からの支えや友人とのかかわりが大きな役割を果たしています。そういう意味で、よき友を得ることは大人になるための必要な条件の一つであるともいえます。

皆さんがこれからの人生で迷ったときやスランプに陥ったとき、これまでの学校生活で得た、あるいはこれからの社会生活で得であろう真の友人が大いに助けとなることでしょうか。真の友人は、嬉しいときには一緒に喜んでくれ、悲しいときには共に泣いてくれます。

原始仏教経典の中に『シンガーラへの教え』というのがあります。この中にも、「助けてくれる友人、苦しいときにも楽しいときにも友

人である人、自分のためを思って口をきいてくれる友人、思いやりのある友人、これが本当の友人である。」という釈尊の言葉があります。この内容については珍しくもありませんし、理屈としては誰にもわかることです。しかし、実際に苦しいときに助けてくれ、わがことのように親身になって相談に乗ってくれる友人は、やはり少ないのが現実です。翻って自分が友人に対するとき、本当に真心をつくしているだろうか。自分が苦しいときにのみ友人を求めないで、ふだんから、自分が良き友人であることに努めるべきでありましょう。

幸いにも本学で真の友人に恵まれた人は、この友情が失せることのないよう、今後も連絡を密にすることです。さらにまた、これからの新しい環境の中で積極的に人と交わり、自分の専門とする領域以外の人たちとも交流し、そのことをとおして視野を拓けていくことを願っています。

最後に、これから少しの不安と大きな希望をもって学窓を巣立たれる皆さんに、三好達治の詩の一部を紹介して私の式辞を終えたいと思います。三好達治は大阪市東区南久宝寺町で生まれ育ち、大きな業績を残した昭和を代表する詩人です。大阪市では平成17年度に三好達治を顕彰し、「三好達治賞」を設けていますが、処女詩集『測量船』に「燕」と題する詩があります。

これから南へ旅立とうとする燕たちが電線の上に集まって、いろいろ話し合っています。若い燕たちは危険を伴う長旅や見たこともない海、あるいは海の上でひとりぼっちになるかもしれない不安と恐怖についてあれこれ尋ねます。

——海ってどんなに大きいのか、でも川のほうが長いでせう？

——もし海の上で疲れてしまったらどうすればいいのかしら。海は水ばかりなんでせう。そして空と同じやように、どこにも休むところがないのでせう、横や前から強い風が吹いてきても。

——疲れてみんなからだんだん後に遅れて、ひとりぼっちになってしまったらどんなに悲しく淋しいだらうな。

それに対して親燕がこう答えます。

—いや、心配しなくていいのだ。何も心配するには当らない。海をまだ知らないものは訳もなくそれを飛び越えてしまふのだ。その海がほんとうに大きく思へるのは、それはまだお前たちではない。海の上でひとりぼっちになるのは、それはお前たちではないだろう……。

未知の世界に旅立つには、未知の世界に対するほどよい無知と自分に対する信頼があればいい。皆さんには無限の可能性が 있습니다。その可能性を能力に変えるか否かは、皆さんの努力にかかっています。自らを信じ、絶えざる努力を重ね、精一杯生き抜いていただきたくことを願っています。

それでは皆さん、相愛で学んだ當相敬愛の精神を持ち続け、相愛を心の故郷とし、健康で幸せな生活を送ってください。皆さんの前途を祝し、卒業式・修了式の祝辞といたします。本日は本当におめでとうございました。

以上